

ち日本を訪れ、得意のオーボエと私の琴と合奏できたら素晴らしいコトと夢をえがいています。

( 14 回生 )

## 卒業生だより

古田幸子

私は現在、日本航空東京支店という所で国内及び国際線の航空券の予約発券業務についております。初めは“いらっしゃいませ”の一言もはずかしさで出てこない有様でしたが、慣れれば何とかなるものですね。航空会社勤務の女性といえば、すぐ浮かぶのはスチュワーデスですが、他にも一般事務はむろん、空港で働く人あるいは私のように市内営業所勤務と様々です。私は入社以来この仕事を続けておりますが、ここでは接客業という性質上、女性が主力を占め、いわゆるお茶汲みの要素は全くなく、又、国際線運賃などしょっちゅう変化しているように常に最新の業務知識が必要で、これで完璧という事はないので単調さはあまり感じませんし、結婚後も続けておられる先輩も多く働く意志のある女性にとっては恵まれた環境といえます。女子の海外研修もさかんで私も一年間バリ支店に勤務しました。女が一人海外生活をする、それも留学生としてではなく働くということはあまり広まっていませんし、一度も家を離れたことのない私にとって不安も大きかったのですが、未知の土地への好奇心の方が勝ちましてせっかくの機会だからと決心したわけです。海外支店でも東京にいる時と同様の予約発券業務が本来の仕事ですがそれらに全く関係のないお客様も多く、パスポートをなくしたとか、お金をすられたとか私設大使館といったおもむきもあります。慣れない外国で心細い思いをしている時に日本語の通じる所に来てホッとする気持は非常によくわかりますし(私自身にしても仏語はまるでダメでしたが仕事上は日本人客をもっぱらお世話してましたので何とかやれたわけです)こちらもできるだけお手伝いしたいと思うのですが、なかには何の目的や計画もなくやってきてこまった時だけ泣きついてくる若い人、ようやく日本語の通じる所に来てこれまでのうっぷんを晴らすかのように大きな態度をとる中年男性とか様々ありまして接客業のむずかしさを痛感しました。バリに行けて良かったと思う点は本や写真で見たり、あるいは旅行者として通り過ぎただけではわからない人々の実際の生活を一部にはせよ、見る事ができたということでしょうか。食べる物にしても着る物にしてもマスコミの印象から受ける華やかさはなく一般にとても質素な暮らしぶりでしたし、町にあふれる貧しい国(スペインとか北アフリカなど)からの移住者など、行くまで全然知りませんでした。ともかくこの期間は単に私の業務上の経験をふくらませただけではなく、私個人にとりましてもたいへん貴重な一年間でした。

( 20 回生 )